現代日本小說大系

60

昭和

913.6
G 34
60

日本近代文學研究會編集

現代日本小說大系

第六十卷

河出書房版

現代日本小説大系　第六十卷

昭和二十七年四月一日　初版印刷
昭和二十七年四月五日　初版發行

定價　貳百參拾圓
地方定價　貳百四拾圓

著者代表　幸田露伴
東京都千代田區神田小川町三丁目八番地
發行者　河出孝雄
東京都千代田區神田小川町三丁目八番地
日本近代文學研究會
編集者　中村光夫
東京都青梅市根ケ布三八五番地
印刷者　山田一雄

發行所　東京都千代田區神田小川町三ノ八　株式會社　河出書房
電話神田（25）二三四七番　三一七四番

本製・株式會社大化堂印刷

目次

幸田露伴
連環記……三
永井荷風
墨東綺譚……四一
正宗白鳥
根無し草……九一
徳田秋聲
縮圖……一四三
解説（中村光夫）……二五七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

幸田露伴

連環記

慶滋保胤は賀茂忠行の第二子として生れた。兄の保憲は累代の家の業を嗣いで、陰陽博士、天文博士となり、賀茂氏の宗として、其系圖に輝いてゐる。保胤はこれに讓つたといふのでもあるまいが、自分は當時の儒家であり詞雄であつた菅原文時の弟子となつて文章生となり、姓の文字を改めて、慶滋とした。慶滋といふ姓があつたのでも無く、古い書に傳へてあるやうに他家の養子となつて慶滋となつたのでも無く、兄に遜るやうな意から、賀茂の賀の字に換へるに慶の字を以てし、茂の字に換へるに滋の字を以てしたのみで、異字同義、慶滋はもとより賀茂なのである。よししげの保胤など〻讀む者の生じたのも自然の勢ではあるが、後に保胤の弟の文章博士保章の子の爲政が善滋と姓の字を改めたのも同じことであつて、爲政は文章博士で、續本朝文粹の作者の一人である。保胤の兄保憲は十歳許の童兒の時、法眼既に明らかにして鬼神を見て父に注意したと語り傳へられた其道の天才であり、又保胤の父の忠行は後の人の嘖〻として稱する陰陽道の大の驗者の安倍晴明の師であつたのである。此の父兄や弟や姪を有した保胤ももとより尋常一樣のものでは無かつたらう。

保胤の師の菅原文時は、これも亦一通りの人では無かつた。當時の文人の源英明にせよ、源爲憲にせよ、今猶其文は本朝文粹にのこり、其才は後人に艶稱さる〻人〻も、皆文時に請ひて其文章詞賦の斧正を受けたといふことである。ある時御内宴が催されて、詞臣等をして、宮鶯囀二曉光一といふ題を以て詩を賦せしめられた。天皇も文雅の道にいたく御心を寄せられたること〻て、

露は濃やかにして　緩く語る　園花の底、
月は落ちて　高く歌ふ　御柳の陰。

といふ句を得たまひて、ひそかに御懷に協ひたるやう思したまひたる時、文時もまた句を得て、

西の樓　月　落ちたり　花の間の曲、
中殿　燈　殘えんとす　竹の裏の聲。

と、つらねた。天皇聞しめして、我こそ此題は作りぬきたりと思ひしに、文時が作れるも又すぐれたり、と思召して、文時を近〻と召して、いづれか宜しきやと、仰せられた。文時は御製いみじく、下七字は文時が詩にも優れて候、と申した。これは憚りて申すならんと、ふた〻び押返し御尋ねになつた。文時是非なく、實には御製と臣が詩と同じほどにも候か、と申した。猶も憚りて申すこと〻思召して、まこと然らば誓言を立つべしと、深く詩を好ませたまふ餘りに逼つて御尋ねあると、文時ここに至つて誓言は申上げず、まことには文時が詩は一段と上に居り候、と申して逃げ出してしまつたので、御笑ひになつて、うなづかせたまふたといふことであつた。かういふ文時の詩文は菅三品の作として今に稱揚せられて傳はつてゐるが、保胤は實に當時の巨匠たる此人の弟子の上席であつた。疫病の流行し

た年、或人の夢に、疫病神が文時の家には押入らず、其の前を禮拜して過ぐるのを見た、と云はれたほど時人に尊崇された菅三品の門に遊んで、才識日に長じて、聲名世に布いた保胤は、試に應じて及第し、官も進んで大内記にまでなつた。

具平親王は文を好ませたまひて、時の文人學士どもを雅友として引見せらるゝことも多く、紀ノ齊名、大江ノ以言などは、いづれも常に伺候したが、中にも保胤は師として遇したまふたのであつた。しかし保胤は夙くより人間の紛紜にのみ心は傾かないで、當時の風とは言へ、出世間の清寂の思に胷が染みてゐたので、親王の御爲に講ずべきことは講じ、訓へまゐらすべきことは訓へまゐらせても、其事一ト わたり濟むと、おのれはおのれで、眼を少し瞑つたやうにし、口の中でかすかに何か念ずるやうにしてゐたといふ。想を佛土に致し、佛經の要文なんどを潛かに念誦したことゝ見える。隨分奇異な先生ぶりではあつたらうが、何も當面を錯過するのでは無く、寸暇の遊心を聖道に運んでゐるのみであるから、咎めるべきにはならぬことだつたらう。もと〳〵狂言綺語卽ち詩歌を讚佛乘の緣として認めるとした白樂天のやうな思想は保胤の是としたところであつたには疑無い。

この保胤に對しては親王も他の藻繪をのみ事とする詞客に對するとはおのづから別樣の待遇をなされたであらうが、それでも詩文の道にかけては御尋ねの出るのは自然の事で、或時當世の文人の品評を御求めになつた。そこで保胤は是非無く御答へ申上げた。齊名が文は、月の冴えたる良き夜に、やゝ古りたる檜皮葺の家の御簾ところ〴〵はづれたる中に女の箏の琴彈きすましたるやうに聞ゆ、と申した。以言はと仰せらるれば、白沙の庭前、翠松の陰の下に、陵王の舞樂を奏したるに似たり、と申す。大江ノ匡衡は、と御尋ねあれば、鋭士數騎、介冑を被り、駿馬に鞭打つて、粟津の濱を過ぐるにも似て、其鋒森然として當るものも無く見ゆ、と申す。親王興に入りたまひて、さらば足下のは、と問はせたまふに、舊上達部の檳榔毛の車に駕りたるが、時に其聲を聞くにも似たらん、と申した。長短高下をとかく申さで、おのづから其詩品を有りのまゝに申したる、まことに唐の司空圖が詩品にも優りて、いみじくも美はしく御答へ申したと、親王も御感あり、當時の人々も嘆賞したのであつた。齊名、以言、匡衡、保胤等の文、皆今に存してゐるから、此評の當つてゐるか、ゐぬかは、誰にでも檢討さるゝことであるが、評の當否よりも、評の仕方の如何にも韵致があつて、仙禽おのづから幽鳴を爲せる趣があるのは、保胤其人を見るやうで面白いと云ひたい。

慾を捨て道に志すに至る人といふものは、多くは人生の蹉躓にあつたり、失敗窮困に陷つたりして、そして一旦開悟して頭を回らして今まで歩を進めた路とは反對の路へ歩むものであるが、保胤には然樣した機緣があつて、それから轉向したとは見えない。自然に和易の性、慈仁の心が普通人より長けた人で、そして儒敎の仁、佛道の慈といふことを、素直に受入れて、人は然樣あるべきだと信じ、然樣ありたいと念じ、學問修證の漸く進むに連れて、愈々日に月に其傾向を募らせ、又其傾向の愈募らんことを祈求して已まぬのをば、是眞實道、是無上道、是清淨道、是安樂道と信じてゐたに疑無い。それで保胤は性來

慈悲心の強い上に、自ら强ひてさへも慈悲心に住してゐたいと策勵してゐたことであらうか。かういふことが語り傳へられてゐる。如何なる折であつたか、保胤は或時往來繁き都の大路の辻に立つた。大路の事であるから、貴き人も行き、賤き者も行き、職人も行き、物賣りも行き、老人も行けば婦人も行き、小兒も行けば壯夫も行く、亢々然と行くものもあれば、踉蹌として行くものもある。何も大路であるから不思議なことは無い。たま〳〵又非常に重げな嵩高の荷を負ふて喘ぎ〳〵大車の軛につながれて涎を垂れ脚を踏張つて行く牛もあつた。これもまた牛馬が用ゐられた世の事で何の不思議もないことであつた。牛は力の限りを盡して歩いてゐる。しかも牛使ひは力むること猶足らずとして、これを笞うつてゐる。笞の音は起つて消え、消えて復起る。これも世の常、何の不思議も無いことである。しかし保胤は佛教の所謂六道の辻にも似た此辻の景色を見て居る間に、揚々たる人、蹶々たる人、營々汲々戚々たる人、嗚呼嗚呼、世法は亦復是の如きのみと思つたでもあつたらう後に、老牛が死力を盡して猶笞を受くるのを見ては、あゝ、疲れたる牛、嚴しき笞、荷は重く途は遠くして、日は熾りに土は焦がる、飲まんとすれど滴水も得ぬ其苦しさや抑如何ばかりぞや、牛目づかひと云ひて人の疎む目づかひのみに得知らぬ意を勵かして何をか訴ふるや、嗚呼、牛、汝何ぞ拙くも牛とは生れしぞ、汝今抑々何の罪ありて、其苦を受くるや、と觀ずる途端に發矢と復笞の音すれば、保胤はハラ〳〵と涙を流して、南無、救はせたまへ、諸佛菩薩、南無佛、々々々、と念じたといふのである。かういふことが一度や二度では無く、又或は直接方便の有つた場合には牛馬其他の當面の苦を救つてやつたことも度々あつたので、其噂は遂に今日にまで遺り傳はつたのであらう。服牛乘馬は太古からの事で、世法から云へば保胤の所爲の如きはおろかなことであるが、是の如くに感ずるのが、いつはりでも何でもなく、又是の如くに感じ是の如くに念ずるのを以て正である善であると信じてゐる人に對しては、世法からの智愚の判斷の如きは本より何ともすることの出來ぬ、力無いものである。又佛法から云つても是の如く慈悲の念のみの亢張するのが必ずしも可なるのでは無く、場合によつては是の如きは魔境に墜ちたものとして彈呵してある經文もあるが、保胤のは慈念や悲念が亢ぶつて、それによつて非違に趨るに至つたのでも何でもないから、本より非難すべくも無いのである。

たゞし世法は慈仁のみでは成立たぬ、仁の向側と云つては少しをかしいが、義といふものが立てられてゐて、義は利の和なりとある。仁のみ過ぎて、利の和を失つては、不埒不都合になつて、やゝ無茶苦茶になつて終ふ。で、保胤の慈仁一遍の調子では、保胤自身を累することの起るのも自然のことである。しかしそれも純情で押切る保胤の如き人に取つては、世法の如きは、燈芯の繩張同樣だと云つて終はれゝばそれまでゞある。或時保胤は大內記の官のおもて、催されて御內へ參入しかけた。衞門府といふのが御門警衞の府であつて、左右ある。其の左衞門の陣あたりに、女が實に苦しげに泣いて立つてゐた。牛にさへ馬にさへ悲憐の涙を惜まぬ保胤である、若い女の苦しみ泣いてゐるのを見て、よそめに過さうやうは無い。つと立寄つて、何事があつて其樣には泣き苦むぞ、と問慰めてやつた。女は答

へわづらつたが親切に問うてくれるので、まことは主人の使にて石の帶を人に借りて歸り候が、路にておろかにも其を取りおとして失ひ、さがし求むれど似たるものもなく、いかにともすべきやうなくて、土に穴あらば入りても消えんと思ひ候、主人の用を缺き、人さまの物を失ひ、生きても死にても身の立つべき瀨の有りとしも思へず、と泣きさくりつゝ、たど〳〵しく言つた。石の帶といふは、黑漆の革の帶の背部の飾りを、石で造つたものをいふので、衣冠束帶の當時の朝服の帶であり、位階によりて定制があり、紀伊石帶、出雲石帶等があれば、石の形にも方なのもあれば丸なのもある。石帶を借らせたとあれば、女の主人は無論參朝に逼つて居て、朋友の融通を仰いだのであらうし、それを遺失したといふのでは、女のおろかさは云ふまでも無いし、其の困惑さも亦言ふまでも無いが、主人もこれには何共困るだらう、何とかして遣りたいが、差當つて今何とすることもならぬ、是非が無い、自分が今帶びてゐる石帶を貸してやるより道は無いと、自分が今催促されて參入する氣忙しさに、思慮分別の暇も無く、よし〳〵、さらば此の石帶を貸さんほどに疾く〳〵主人が方にもて行け、と保胤は我が着けた石帶を解きてする〳〵と引出して女に與へた。女は佛菩薩に會つた心地して、掌をすり合せて禮拜し、悅び勇んで、いそ〳〵と忽ち去つてしまつた。保胤は人の急を救ひ得たのでホツと一ト安心したが、ア、今度は自分が石帶無し、石帶無しでは出るところへ出られぬ。

いかに佛心仙骨の保胤でも、我ながら、我がおぞましいことをして退けたのには今さら困じたことであらう。さて片隅に帶もなくて隱れ居たりけるほどに、と今鏡には書かれてゐるが、其の片隅とは何處の片隅か、衞門府の片隅でも有らうか不明である。何にしろまご〳〵して弱りかへつて度を失つてゐたことは思ひやられる。其の風態は想像するだにをかしくて堪へられぬ。公事まさにはじまらんとして保胤が未だ出て來ないでは仕方が無いから、屬僚は遲い〳〵と待ち兼ねて迎へ求めに出て來た。此體を見出しては、互に呆れて變な顏を仕合つたらう。でも公事に急かれては其儘には濟まされぬので、保胤の面目無さ、人々の厄介千萬さも、御用の進行の大切に押流されて了つて、人々に世話を燒かれて、御くらの小舍人とかに帶を借りて、辛くも內に入り、公事は勤め果したといふことである。

此の物語は疑はしいかどもあるが、まるで無根のことでも無からうか。何にせよ隨分突飛な談ではある。しかし大に歪められた談にせよ、此談によつて保胤といふ人の、俗智の乏しく世法に疎かつたことは遺憾無く現はされてゐる。これでは如何に才學が有つて、善良な人であつても、世間を危氣無しには渡つて行かれなかつたらうと思はれるから、まして官界の立身出世などは、東西相距る三十里だつたであらう。

斯樣な人だつたとすれば、餘程俗才のある細君でも持つてゐない限りは家の經濟などは埒も無いことだつたに相違ない。そこで志山林に在り、居宅を營まず、など云はれゝば、大層好いやうだが、實は爲うこと無しの借家住ひで、長い間の朝夕を上東門の人の家に暮してゐた。それでも段々年をとつては、せめて起臥を我が家でしたいのが人の通情であるから、保胤も六條の荒地の廢いのを購つて、吾が住居をこしらへた。勿論立派

な邸宅といふのでは無かつたに疑ひ無いが、流石に自分が造り得たのだから、其居宅の記を作つて居る、それが今存してゐる池亭記である。記には先づ京都東西の盛衰を敍して、四條以北、乾艮二方の繁榮は到底自分等の居を營むを許さざるを述べ、六條以北、窮僻の地に、十有餘畝を得たのを幸とし、隘きに就きては小山を爲り、窪きに就きては小池を穿ち、池の西には小堂を置きて彌陀を安んじ、池の東には小閣を開いて書籍を納め、池北には低屋を起して妻子を著けり、と記してゐる。阿彌陀堂を置いたところは、如何にも保胤らしい好みで、いづれさゝやかな堂ではあらうが、そこへ朝夕の身を運んで、燒供華、禮拜誦經、心しづかに稱名したらう眞面目さ、おとなしさは、何といふ人柄の善いことだらう。凡そ屋舍十の四、池水九の三、菜園八の二、芹田七の一、とあるので、全般の樣子は想ひやられるが、芹田七の一がおもしろい。池の中の小島の松、汀の柳、小さな柴橋、北戸の竹、植木屋に褒められるほどのものは何一ツ無く、又先生の眉を皺めさせるやうな牛に搬ばせた大石なども更に見えなくても、蕭散な庭のさまは流石に佳趣無きにあらずと思はれる。予行年漸く五旬になりなんとして適〻小宅有り、蝸其舍に安んじ、虱其の縫を樂む、と言つてゐるのも、けちなやうだが、其實を失はないで宜い。家主、職は柱下に在りと雖も、心は山中に住むが如し。官爵は、運命に任す、天の工均し矣。壽夭は乾坤に付す、丘の禱ることや久し焉。と內〻少し氣燄を揚げて居るのも、ウソでは無いから憎まれぬ。朝に在りて身暫く王事に隨ひ、家にありては心永く佛那に歸す、とあるのは、儒家としては感服出來ぬが、此人としては率直の言である。夫の漢の文皇帝を異代の主と爲す、と云つてゐるのは、腑に落ちぬ言だが、其後に直に、儉約を好みて人民を安んずるを以てなり、とある。一體異代の主といふのは變なことであるが、心裏に慕ひ奉る人といふほどのことであらう。儉約を好んで人民を安んずる君主は、眞に學ぶべき君主であると思つてゐたからであらうか、何も當時の君主を奢侈で人民を苦める御方と見做す如き不臣の心を持つて居たでは萬〻あるまい、たゞし儉約を好み人民を安んずるの六字を點出して、此故を以て漢文を崇慕するとしたに就ては、聊か意なきにあらずである。それは此記の冒頭に、二十餘年以來、東西二京を歷見するに、云〻と書き出して、繁榮の地は、高家比門連堂、其價値二三畝千萬錢なるに至れることを述べて居るが、保胤の師の菅原文時が天曆十一年十二月に封事三條を上つたのは、丁度二十餘年前に當つて居り、當時文化日に進みて、奢侈の風、月に長じたことは分明であり、文時が奢侈を禁ぜんことを請ふの條には、方今高堂連閣、貴賤共に其居を壯にし、麗服美衣、貧富同じく其製を寬にすると云ひ、富める者は產業を傾け、貧者は家資を失ふ、と既に其弊の見はるゝを云つて居る。物價は騰貴をつゞけて、國用漸く足らず、官を賣つて財に換ふるのことまで生するに至つたことは、同封事第二條に見え、若し國用を憂ふならば則ち每事必ず儉約を行へ、と文時をして切言せしめてゐる。爾後二十餘年、世態愈〻變じて、華奢增長してゐたらうから、保胤のやうなおとなしい者の眼からは、儉約安民の上を慕はしく思つたのであらう。次に、唐の白樂天を異代の師と爲す、詩句に長じて佛法に歸するを以てなり、と記してゐる。白

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

氏を詩宗としたのは保胤ばかりでなく、當時の人皆然りであつた。たゞ保胤の白氏を尊ぶ所以は、詩句に長じたからのみではなく、白氏の佛法に歸せるに取るあるのである。ところが白氏は臺所婆なぞを定規にして詩を裁つた人なので、氣の毒に其の益をも得たらうが其弊をも受け、又白氏は唐人の習ひ、彌勒菩薩の徒であつたらうに、保胤は彌陀如來の徒であつたのはをかしい。次に、晉朝の七賢を異代の友と爲す、身は朝に在つて志は隱に在るを以てなり、と記してゐる。竹林の七賢は、いづれ洒落た者どもには相違無いが、懷中に算籌を入れてゐたやうな食へない男も居て、案外保胤の方が善いお父さんだつたか知れない。是の如く敍し來つたとて、文海の蜃樓、もとより虛實を問ふべきではないが、保胤は日々斯樣いふ人々と遇つてゐるといふのである。そして、近代人世の事、一も戀ふべき無し、人の師たるものは貴を先にし富を先にして、文を以て次せず、師無きに如かず、人の友たる者は勢を以てし利を以てし、淡を以て交らず、友無きに如かず、予門をふさぎ戶を閉ぢ、獨り吟じ獨り詠ず、と自ら足りて居る。應和以來世人好んで豐屋峻宇を起し、殆ど山節藻梲に至る、其費且つ亘千萬、其住纔に二三年、古人の造る者居らずと云へる、誠なるかな斯言、と嘲り、自分の暮齒に及んで小宅を起せるを、老蠶の繭を成すが如しと笑ひ、其の住むこと幾時ぞや、と自ら笑つて居る。老蠶の繭を成せる如し、とは流石に好かつた。此記を爲せるは、天元五年の冬、保胤四十八九歲とおもはれる。

保胤が日本往生極樂記を著はしたのは、此の六條の池亭に在つた時であらうと思はれる。今存してゐる同書は朝散大夫著作郎慶保胤撰と署名してある、それに據れば保胤が未だ官を辭せぬ時の撰にかゝると考へられるからである。其書に敍して、保胤みづから、予少きより日に彌陀佛を念じ、行年四十以後、其志彌々劇しく、口に名號を唱へ、心に相好を觀じ、行住坐臥、暫くも忘れず、造次顚沛も必ず是に於てす、夫の堂舍塔廟、彌陀の像有り淨土の圖ある者は、禮敬せざるなく、道俗男女、極樂に志す有り、往生を願ふ有る者は、結緣せざる莫し、と云つて居るから、四十以後、道心日に募りて已み難く、しかも未だ官を辭さぬ頃、自他の信念勸進のために、往生事實の良驗を錄して、本朝四十餘人の傳をものしたのである。淸閑の池亭の中、佛前唱名の間々に、筆を執つて佛菩薩の引接を承けた善男善女の往迹を物しづかに記した保胤の旦暮は、如何に塵界を超脫した淸淨三昧のものであつたらうか。此の往生極樂記は其序に見える通り、唐の弘法寺の僧の釋迦才の淨土論中に、安樂往生者二十人を記したのに倣つたものであるが、保胤往生の後、大江匡房は又保胤の往生傳の先蹤を追うて、續本朝往生傳を撰してゐる。そして其續傳の中には保胤も採錄されてゐるから、法緣微妙、玉環の相連なるが如しである。匡房の續往生傳の敍に、寬和年中、著作郎慶保胤、往生傳を作りて世に傳ふ、とあるに據れば、保胤が往生傳を撰したのは、正しく保胤が脫白被緇の前年、五十一二歲頃、彼の六條の池亭に在つた時でもあつたらう。

保胤が池亭を造つた時は、自ら記して、老蠶の繭を成せるがごとしと云つたが、老蠶は永く繭中に在り得無かつた。天元五年の冬、其家は成り、其記は作られたが、其翌年の永觀元年に

は倭名類聚抄の撰者の源順は死んだ。順も博學能文の人であつたが、後に大江匡房が近世の才人を論じて、橘ノ在列は源ノ順に及ばず、順は以言と慶滋保胤とに及ばず、と斷じた。保胤と順とは別に關渉は無かつたが、兎死して狐悲む道理で、前輩知友の段々と凋落して行くのは、さらぬだに心やさしい保胤には向佛の念を添へもしたらう。世の中は漸く押詰つて、人民安からず、去年は諸國に盜賊が起り、今年は洛中にて猥りに兵器を携ふるものを捕ふるの令が出さるゝに至つた。これと云つて保胤の身近に何事が有つたわけでは無いが、かねてからの道心愈熟したからであらう。保胤は遂に寛和二年を以て、自分が折角こしらへた繭を咬破つて出て、落髪出家の身となつて終つた。戒師は誰であつたか、何の書にも見えぬが、保胤ほどの善信の人に取つては、道の傍の杉の樹でも、田の畦の立杭でも、戒師たるに足るであらうから、誰でも宜かつたのである。多武峰の增賀上人、横川の源信僧都、皆いづれも當時の高僧で、しかも保胤には有緣の人であつたし、其他にも然るべき人で得度させて呉れる者は澤山有つたらうが、まさか野菜賣りの老翁が小娘を失つた悲みに自剃りで坊主になつたといふやうな次第でもあるまいに、更に其噂の傳はらぬのは不思議である。匡房が續往生傳には、子息の冠笄纔に畢るに及んで、遂に以て入道す、とあるばかりだ。それによれば、何等の機緣が有つたのでも無く、我兒が一人で世に立つて行かれるやうになつたので、豫ての心願に任せて至極安穩に、時至つて瓜が蔕から離れるが如く俗世界からコロリと滑り出して後生願ひ一方の人となつたのであらう。保胤の妻及び子は何樣な人であつたか、更に分らぬ。子は有つたに相違ないが、傍系の故だか、加茂氏系圖にも見當らぬ。思ふに妻も子も尋常無異の人で、善人ではあつたらうが、所謂草芥と丶もに朽ちたものと見える。

保胤は入道して寂心となつた。世間では內記の聖と呼んだ。在俗の間すら禮佛誦經に身心を打込んだのであるから、寂心となつてからは、愈々精神を抖擻して、問法作善に油斷も無かつた。傳には、諸國を經歷して廣く佛事を作した、とあるが、別に行脚の苦修談などは傳へられてゐない。たゞ出家して後わづかに三年目には、自分に身を投げかけて來た者を濟度して寂照といふ名を與へた。此の寂照は後に源信の爲に宋に使したもので、寂心と源信とはもとより菩提の友であつた。源信の方が寂心よりは少し年が劣つて居たかも知らぬが、何にせよ幼きより叡山の慈慧に就いて勵精刻苦して學び、顯密雙修、行解並列の恐ろしい傑物であつた。此の源信と寂心との間の一寸面白い談は、今其の出處を確記せぬが、閑居之友であつたか何だつたか、何でも可なり古いもので見たと思ふのである。記憶の間違だつたら抹殺して貰はねばならぬが。

或時寂心は横川の慧心院を訪うた。院は寂然として人も無いやうであつた。他行であるか、禪定であるか、觀法であるか、何かは知らぬが、互に日頃から、見ては宜からぬ、見られては宜からぬ如き行儀を互に有たぬ同士であるから、遠慮無く寂心は安詳にあちこちを見廻つた。源信は何處にも居なかつた。やがて、こゝぞと思ふ室の戸を寂心は引開けた。すると是は如何に、眼の前は茫々漠々として何一ツ見えず、イヤ何一ツ見えないのでは無い、唯是れ漫々洋々として、大河の如く大湖の如く

大海の如く、漪〻たり瀲〻たり、汪〻たり滔〻たり、洶たり沸たり、煙波糢糊、水光天に接するばかり、何も無くして水ばかりであつた。寂心は後へ一ト足引いたが、恰もそこに在つた木枕を取つて中へ打込み、さらりと戸をしめて院外へ出て歸つてしまつた。

源信はそれから身痛を覺えた。寂心が來て卒爾の戯れをしたことが分つて、源信はふたゝび水を現じて、寂心に其中へ投げ入れたものを除去させた。源信はもとの如くになつた。

此の談は今の人には、たゞ是れ無茶苦茶の譚と聞えるまでゞあらう。又これを理解のゆくやうに語りわけることも、敢てするには當るまい。が、これは源信寂心にはじまつたことではなく、經に在つては月光童子の物語がこれと同じ事で、童子は水觀を初めて成し得た時に、無心の小兒に瓦礫を水中に投げ入れられて心痛を覺え、それを取出して貰つて安穩を回復したといふのである。傳に在つては、唐の法進が竹林中で水觀を修めた時に、これは家人が繩床上に清水があるのを見て、二ツの小白石を其中に置いたので、それから背痛を覺え、後また其を除いて貰つて事無きを得たといふ談がある。日本でも大安寺の勝業上人が水觀を成じた時同じく石を投げ入れられて、これは何が痛んだといふ談があつて、何も希有な談でも何でもない。清水だらうが、洪水だらうが、瓦礫だらうが、小白石だらうが、何だつて構ふことは無い、源信寂心の間に斯樣な話の事實が有つたらうが、無かつたらうがそんなことは實は何樣でもよい、ただ斯樣いふ談が傳はつてゐるといふだけである。いや實はそれさへ覺束ないのである。ただ寂心の弟子の寂照が後に源信の弟子同樣の態度を取つて支那に渡るに及んでゐるほどであるから、寂心源信の間には、日ごろ經律の論、證解の談が互に交されてゐたらうことは想ひやられる。勿論文辭に於ては寂心に一日の長があり、法悟に於ては源信に數歩の先んずるものが有つたらうが、源信もまた一乘要訣、往生要集等の著述少からず、寂心と同じやうに筆硯の業には心を寄せた人であつた。

寂心は彌陀の慈願によつて往生淨土を心にかけたのみの、まことに素直な佛徒ではあつたが、此時はまだ後の源空以後の念佛宗のやうな教義が世に行はれてゐたのではなく、したがつて捨閉擱抛と、他の事は何も彼も擲ち捨てゝ南無阿彌陀佛一點張り、唱名三昧に二六時中を過したといふのではなく、後世からは餘業雜業と斥けて終ふやうなことにも、正道正業と思惟さるる事には恭敬心を以て如何にも素直にこれを學び之を行じたのであつた。で、横川に增賀の聖が摩訶止觀を說くに當つて、寂心は就いて之を承けんとした。

增賀は參議橘恒平の子で、四歲の時につきものがしたやうに、叡山に上つて學問をしよう、と云つたとか傳へられ、十歲から山へ上せられて、慈慧に就いて佛道を學んだ。聰明驚くべく、學は顯密を綜べ、尤も止觀に邃かつたと云はれてゐる。眞の學僧氣質で、俗氣が微塵ほども無く、深く名利を惡んで、斷岸絕壁の如くに身の取り置きをした。元亨釋書に、安和の上皇、勅して供奉と爲す、佯狂垢汗して逃れ去る、と記してゐるが、憚りも無く馬鹿げた事をして、他に厭ひ忌まれても、自分の心に濟むやうに自分は生活するのを可なりとした人であつた。自分の師の慈慧が僧正に任ぜられたので、宮中に參つて御

禮を申上げるに際し、一山の僧侶、翼從甚だ盛んに、それこそ威儀を嚴莊にし、飾り立てゝ錬り行つた。一體本來を云へば樹下石上にあるべき僧侶が、御尊崇下さる故とは云へ、世俗の者共月卿雲客の任官謝恩の如くに、喜びくつがへりて、綺羅をかざりて宮廷に拜趨するなどといふべきことのあるべきでは無いから、增賀には俗僧どもの所爲が盡く氣に入らなかつたのであらう。衞府の大官が立派な長劒を帶びたやうに、乾鮭の大きな奴を太刀の如くに腰に佩び、裸同樣のあさましい姿で、痩せた牝牛の上に乘跨がり、えらさうな顏をして先驅の列に立つて、都大路の諸人環視の中を堂々と打たせたから、群衆は呆れ、衆徒は驚いて、こは何事と增賀を引退らせようとしたが、增賀は聲を厲しくして、僧正の御車の前駈、我をさしおいて誰が勤むべき、と怒鳴つた。盛儀も何樣も散々な打壞しであつた。かういふ人だつたから、或立派な家の法會があつて、請はれて其處へ趣く途中、是は名聞のための法會である、名聞のためにすることは魔緣である、と思ひついたので、遂に願主と拷りあひ的評議を仕出して終つて、折角の法會を減茶々々にして歸つた。隨分厄介といへば厄介な僧である。

かゝる狂氣じみたところのある僧であつたから、三條の大きさいの宮が尼にならせ給はんとして、增賀を戒師とせんとて召させたまひたる時、途轍も無き麤言を吐き、惡行をはたらき、殊勝の筵に列れる月卿雲客、貴嬪采女、僧徒等をして、身戰き色失ひ、慙汗憤淚、身をおくところ無からしめたのも、うそでは無かつたらうと思はれる。それを記してゐる宇治拾遺の卷十二の文は、こゝに抄出するさへ忌はしいから省くが、虎關禪師は、出麁語の三字きりで濟ませてゐるから上品ではあるが事情は分らぬ。大江匡房は詞藻の豐な人であつて、時代も近い人だつたから、記せぬわけにもゆかぬと思つて書いたのであらうが、流石に筆鋒も簪蹙してゐる。放臭風の三字を以て瀉下したことを寫してゐるが、寫し得てゐない。誰人以二增賀一爲二惡毒之輩一、啓達后聞一乎、と麁語を譯してゐるが、これも髣髴たるに至らず、譯して眞を失つてゐる。仕方が無い。匡房の才の拙なるにあらず、增賀の狂の甚しきのみと言つて置かう。釋迦の弟子の中で迦留陀夷といふのが、敎壇の上で穢語を放つて今に遺り傳はつてゐるが、迦留陀夷のはたゞ阿房げてゐるので、增賀のは其時既に衰老の年であつたが、ふたゝび官闈などに召出されぬやう斬釘截鐵的に狂叫したのだとも云へば云へよう。實に斷岸絕壁、近より難い、天台禪ではありながら、祖師禪のやうな氣味のある人であつた。

此の斷岸絕壁のやうな智識に、淸淺の流れ靜かにして水は玉の如き寂心が摩訶止觀を學び承けようとしたのであつた。止觀は隋の天台智者大師の所說にして門人灌頂の記したものである。たとひ唐の毗陵の堪然の輔行弘決を未だ寂心が手にし得無かつたにせよ、寂心も既に半生を文字の中に暮して、經論の香氣も身に浸々と味はつてゐるのであるから、止觀の文の讀取れぬわけは無い。然し甚源微妙の祕奧のところをといふので、乞ふて增賀の壇下に就いたのである。勿論同會の僧も幾人か有つたのである。增賀はおもむろに說きはじめた。止觀明靜、前代未だ聞かず、といふ最初のところから演べる。其の何樣いふところが寂心の胷に響いたのか、其の意味がゝ、其の音聲が乎、

其の何の章、何の句がゝ、其の講明が乎演說が乎は、今傳へられて居らぬが、蓋し或箇處、或言句からといふのでは無く、全體の其時の氣味合からでも有つたらうか、寂心は大に感激した隨喜した。そして堪り兼ねて流涕し、すゝり泣いた。すると增賀は忽ち座を下りて、つか〳〵と寂心の前へ立つなり、しや、何泣くぞ、と拳を固めて、したゝかに寂心が面を張りゆがめた。餘の話の聲など立てゝ妨ぐればこそ、感涙を流して謹み聞けるものを打擲するは、と人々も苦りきつて、座もしらけて其儘になつて終つた。さてあるべきではないから、寂心も涙を收め、人々も增賀をなだめすかして、ふたゝび講說せしめた。と、又寂心は感動して泣いた。增賀は又拳をもつて寂心を打つた。是の如くにして寂心の泣くこと三たびに及び、增賀は遂に寂心の誠意誠心に感じ、流石の增賀も增賀の方が負けて、それから遂に自分の淵底を盡して止觀の奧祕を寂心に傳へたといふことである。何故に泣いたか、何故に打つたか、それは二人のみが知つたことで、同會の衆僧も知らず、後の我等も知らぬとして宜いことだらう。

寂心が出家した後を續往生傳には、諸國を經歷して、廣く佛事を作した、とのみ記してあるばかりで、何樣いふことがあつたといふことは載せてゐないが、既に柔輭の佛子となつた以上は別に何の事の有らう譯も無い。しかし諸國を經歷したとある其の諸國とは何處何處であつたらうかといふに、西は播磨、東は三河にまで行つたことは、證があつて分明するから、猶遠く西へも東へも行つたかと想はれる。其の播磨へ行つた時の事である。これは堂塔伽藍を建つることは、法の爲、佛の最善根であるから、寂心も例を追うて、其のため播磨の國に行いて材木勸進をした折と見える。何處の町とも分らぬが、或處で寂心が偶然見やると、一人の僧形の者が紙の冠を被て陰陽師の風體を學び、物々しげに祓するのが眼に入つた。もとより陰陽道を以て立つてゐる賀茂の家に生れた寂心であるから、自分は其道に依らないで儒道文辭の人となり、又其の儒を棄て佛に入つて今の身になつてはゐるものゝ、陰陽道の如何なるものかの大凡は知つてゐるのである。陰陽道は歷緯に法り神鬼を驅ると稱して、世俗の爲に吉を致し凶を禳ふものである。儒より云へば巫覡の道、佛より云へば旃陀羅の術である。それが今、かりにも法體して菩提の大道に入り、人天の導師ともならんと心掛けたと見ゆる者が、紙の冠などして、えせわざするを見ては、堪へ得らるればこそ、其時は寂心馬に打乘り威儀かいつくろひて路を打たせてゐたが、忽ち滾るやうに馬から下り、あわてゝ走り寄つて、なにわざし給ふ御房ぞと、詰り咎めた。御房とは僧に對する稱呼である。御房ぞと咎めたのは流石に寂心で、實に宜かつた。しかし紙の冠して其樣な事をするほどの者であつたから、却つてけゞんな顏をしたことであらう。祓を仕候也、と答へた。何しに紙の冠をばしたるぞ、と問へば、祓戶の神たちは法師をば忌みたまへば、祓をするほど少時は仕て侍るといふ。寂心今は堪へかねて、聲をあげて大に泣きて、陰陽師につかみかゝれば、陰陽師は心得かねて只呆れに呆れ、祓をしさして、これは如何に、と云へば、賴みて祓をさせたる主人も驚き呆れた。寂心は猶も獨り感じ泣きて、彼の紙の冠を攫み取りて、引破りて地に拋ち、漣々たる涙を止めもあへず、何たる御房ぞや、

尊くも佛弟子となりたまひながら、祓戸の神の忌みたまふとて如來の忌みたまふことを忘れて、世俗に反り、冠などして、無間地獄に陷る業を造りたまふぞ、誠に悲しき違亂のことなり、强ひて然ることせんとならば、たゞこゝにある寂心を殺したまへ、と云ひて泣くことおびたゞしいので、陰陽師は何としようも無く當惑したが、飽まで俗物だから、俗にくだけて打明け話に出た。仰せは一ゝ御もつともでござる。しかし浮世の過しがたさに、是の如くに仕る。然らずば何わざをしてかは妻子をばやしなひ、吾が生命をも續ぐことのなりませうや。道業猶つたなければ上人とも仰がれず、法師の形には候へど俗人の如くなれば、後世のことはいかゞと哀しくはあれど、差當りての世のならひに、かくは仕る、と語つた。何時の世にも斯樣いふ俗物は多いもので、そして又然樣いふ俗物の言ふところは、俗世界には如何にも正しい情理であると首肯されるものである。しかし折角殊勝の世界に眼を着け、一旦それに對つて突進しようと心ざした者共が、此の一關に塞止められて已むを得ずに、躊躇し、徘徊し、遂に後退するに至るものが、何程多いことであらうか。額を破り胷を傷けるのを憚からずに敢て突進するの勇氣を缺くものは、皆此の關所前で歩を横にしてぶら〳〵して終ふのである。藝術の世界でも、宗教の世界でも、學問の世界でも、人生戰鬪の世界でも、百人が九十九人、千人が九百九十九人、皆此處で後へ退つて終ふのであるから、多數の人の取るところの道が正しい當然の道であるとするならば、疑も無く此の紙の冠を被つた世渡り人の所爲は正しいのである、情理至當のことなのである。寂心は飾り氣の無い此の御房の打明話には、ハタと行詰らされて、優しい自分の性質から、將又智略を以て事に處することを卑しみ、覇氣を消盡するのを以て可なりとしてゐるやうな日頃の修行の心掛から、却つてタヂ〳〵となつて押返されたことだつたらう。ヤ、それは、と一句あとへ退つた言葉を出さぬ譯にはゆかなかつた。が、しかし信仰は信仰であつた。さもあればあれ、と一ト休め息を休めて、いかで三世如來の御姿を學ぶ御首の上に、勿體無くも俗の冠を被玉ふや。不幸に堪へずして斯樣の事を仕給ふとならば、寂心が堂塔造らん料にとて勸進し集めたる物どもを、御房にまゐらすべし、一人を菩薩に勸むれば、堂寺造るに勝りたる功德である、と云つて、弟子共をつかはして、材木とらんとて勸進し集めたる物共を皆運び寄せて此の陰陽師の眞似をした僧に與へやり、さて自分は爲すべしと思へることも得爲さず、身の影ひとつ、京へ上り歸つたといふことである。紙の冠被つた僧は其後何樣なつたか知らぬが、これでは寂心といふ人は專業などは出來ぬ人である。道理で寂心が建立したといふ堂寺などの有ることは聞かぬ。後の高尾の文覺だの、黄蘗の鐵眼だのは、仕事師であるが、寂心は寂心であつた。これでも別に惡いことは無い。

寂心が三河國を經行したといふのは、暁秋過參州藥王寺有感といふ短文が殘つてゐるので此を證するのである。勿論入道してから三河へ行つたのか、猶在俗の時行つたのかは、其文に年月の記が無いから不詳であるが、近江掾になつたことは有つたけれど、大江匡房の慶保胤傳にも、緋袍之後、不改其官と有り、京官であつたから、三河へ下つたのは、僧になつてからの事だつたらうと思はれる。文に、余は是れ羈旅の卒、牛馬の走、初

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.